

楡の会発達研究センター報告、その28 (2012年10月)

\*\*\*\*\*

## 重症心身障害児の臨床心理学

楡の会こどもクリニック

石川 丹

\*\*\*\*\*

### 1 重症心身障害児

心身の発達の重度の遅れ、知的障害身体障害合併重症例、知的にはIQ35以下(乳幼児の智慧)で身体的には独歩不可の人を重症心身障害児と言う。

ざっくばらんに言うと、大きな赤ちゃん、と言っても過言ではない。

### 2 赤ちゃんは2ヵ月齢で自我を持つ

1983年、イギリスのマレーと言う発達心理学者は、当時未だ無かったテレビ電話を作り、お母さんには別室に居る赤ちゃんをテレビ中継を介してあやしてもらおう形のセットアップをして、1~10ヵ月齢の赤ちゃんとそのお母さんをお願いした。

赤ちゃんがあやしに乗ってテレビ画像のお母さんを注目したり、ニコニコしたり、キャッキヤ言って楽しそうにして来た所で、赤ちゃんが見ているテレビ画像をあやし行動をしているお母さんのビデオに切り変えてしまうと、赤ちゃんはやがてあやし画像に反応しなくなり、ポカーンとしたり、何で?という顔をしたり、そっぽを向いたり、機嫌が悪くなったりするように成った、という。2ヵ月齢の赤ちゃんでさえあやし行動をしている母親画像に見向きもしなくなった、との事。

こうした赤ちゃんの行動は、2ヵ月齢で既に自我、“私は私”があり、期待を持てる事が出来ているというふうに解釈できます。

赤ちゃんのみならず、人間誰でも期待通り予想通り想定内であればニンマリ、期待外れ予想違い想定外に対してはガッカリです。

### 3 重症心身障害児も自我を勿論持っている

マレーが明らかにしたように健常発達の赤ちゃんは2ヵ月齢で既に自我を持っているので、重度の重症心身障害の人も自我を持っていると言えましょう。

### 4 定位反応 人(動物)の基本的心理活動

「んっ、あれは何だあ? ああ、~だ、分かった」の心理過程、つまり、感じた刺激、情報を吟味、検討、評価、判断する、つまり認知して納得する過程を定位反応と言う。

生命行動の原点中の原点である。

動物が餌の匂いを嗅いでから食べる場合は、定位反応を実行し、食べられる物と判断してから、食行動に移っている。クリオネだってやみくもに餌に齧り付かないで、突っついたりして餌だと判断してから噛みついていて、だから、定位反応していることになる。捕食植物だって吐き出す事があるので、定位反応をしていると考えられる。

だから、重症心身障害児の人だって定位反応は絶対にしていると言える。

定位反応に時間を掛ける人、つまり「ああじゃないかこうじゃないか」と色々考える人を熟慮型と言い、定位反応が速い人、つまり“猪突猛進”の人を衝動型と言う。

働き掛けに対する反応が遅い人は何も考えてない等と考える事は不遜である。

## 5 コミュニケーションの主なルート

他人の心の中、他人が何をどう感じ考えているか、はその人が表現しない限り他人には分からない。他人の心を直接に覗く事は出来ない。

言葉は表現の一つであるが、表情、仕草、動作も表現方法である。“目は口ほどに物を言う”という諺は“目の色”で表現が可能である事を指摘している事に成る。これを非言語的コミュニケーションと言う。

社会心理学は、大人の一人一人の会話の際のコミュニケーション成立の7割は非言語的表現、つまり表情や仕草を介して、言葉を介したコミュニケーションは3割に過ぎない事を明らかにしている。

人間のコミュニケーションの主なルートは非言語であるので、言葉が無いから何を考えているか分からないと言う人が居たら、その人は科学が明らかにした事を知らない人で、その人は偏見を持っていると言わざるを得ない。そういう人は自らコミュニケーションを拒否してしまっている人と言わざるを得ない。

## 6 重症心身障害児の表現は乏しいからではなく個性豊かで独特だから理解しにくい

重症心身障害児の表現は乏しいので分かりにくいと言う人がいるが、果たしてそうであろうか。乏しいと考えると、当人がもっとたくさん表現しなければこちらには分からない、と言う事に成る。重症心身障害児の人は心のみならず身体にも障害があり、しかも障害は重く、言わば心身共に手枷足枷で雁字搦めに成っている人と言えるのだから、そういう人に、もっとたくさん表現して、言わば“火事場の馬鹿力”を出して、と要求しても、そういう人は答えるのは凄く難しい事は容易に分かろうというものだ。人間誰でも“火事場の馬鹿力”は出し続けられない。

心身共に雁字搦めに成っている人にはその人独特の表現がある筈だと考え、その表現を普通と言われる人が学び取り、彼らの土俵の上に登ってコミュニケーションした方が、分かり合いは深まると考えるのが妥当と言えよう。彼らに比べてずっとスムーズに、気楽に、簡単に心身を動かせる事が出来る普通と言われる人とは、違ったやり方で彼らは表現している筈と考え、彼らの普通と言われる人には特殊な、風変わりな表現を普通の人から教えて

もらった方が事は速い。普通と言われる人の方が心身の働きはスムーズで、小回りが利くからである。

違いを明らかにして同じを探そう、は民主主義のみならず国際交流の基本中の基本である。この基本は障害と言われる人と健常と言われる人の間でも同じであり、障害の重さとは無関係である。

#### 7 喜怒哀楽の表現は誰でも同じ

重症心身障害児の人の表現は独特であると考えられるべきであると上述したが、基本情動、即ち、幸、悲、怒、謙、恐、驚の表現は人間誰でもそんなに大きくは変わらない。

もっと複雑な心、内的世界、心的表象の表現は各人各様である事は言うまでも無い。

普通と言われる人でもお互いの心の内を探り合う事はしばしばあるものである。

#### 8 重症心身障害児の心の理解

関わる人間がその人の定位反応に気付く事がどんな人間関係でも大切である。人にはそれぞれ独特の「ありや何だ？」表情、「ああ分かった」表情がある。それを分かろうとする姿勢が無ければコミュニケーションつまり分かり合いの出発点は失われてしまう。

療育する立場の人は、重症心身障害児の独特の表現行動を見逃さないように、アンテナを高く掲げ、彼らの心に“分かってもらえてる感”が醸し出されたかどうか、正確に判断できる能力を磨かなければならない。

#### 9 Locked in 症候群（閉じ込め症候群）

脳の深い所にある脳幹の橋の腹側両側を損傷すると、眼球と眼瞼だけしか動かせなくなり、四肢麻痺、無表情となる。意識は清明で、睡眠覚醒リズムは保たれる。感覚入力は全て健全で、聞こえる、見える、感じる。痒い所が分かるが搔けない、悪口を言われても怒れない反論できない。一見、無動無言、いわゆる植物状態、本人は伝えたくても伝えられなく成るので物凄く懊惱<sup>おうのう</sup>する事に成るであろう。これを Locked in 症候群と言う。

重症心身障害児は Locked in 症候群に成っている人かもしれないと思って関わると彼らの理解は進む事に成る。何故なら、彼らの独特な表現の中に「この子は何を伝えたがってるのだろう？」と疑問を感じ、その子独特の表現行動があるかもしれない、「～かな？・・・かな？」と色々思い巡らしながら、つまり仮説を沢山立てつつ付き合う事に成るからである。こうじゃないか、ああじゃないか、と考えを巡らせば、理解にしにくい表現も分かって来る確率が上がる。

#### 10 情動 情動表現 情動語

情動は心の中の事である。情動表現は心の中身の表現であり表情、仕草、行動である。情動語は心の中身の言葉による表現である。

情動語の獲得は大人による情動のネーミングによる。赤ちゃんが、悲しくて泣いてたら親は「悲しい」、怒って泣いてたら「怒ってる」、驚愕して泣き出したら「びっくりしたあ」、嫌がってたら「嫌なんだ」、喜んで笑ってたら「嬉しい」、痛がってたら「痛い痛い」等と親は情動語で話し掛ける。そうすると、こう言う気持ちの時はこう言えば良いんだ、ああ言う気持ちの時はああ言えば良いんだ、と理解し、情動語が情動と一致して発せられるように成る。情動を親が代弁して“凶星を言う”（以下の項目15参照）と、“凶星を言う”が言語教育となり、やがて自ら情動語を発するようになる。

### 1.1 プロソディーで伝わる

言葉を発する際の音声の音韻的特徴、即ち、音声の高低、強弱、長短、速度、アクセント、リズム、イントネーション、ポーズ、つまり言葉のメロディーをプロソディーと言う。

言語にはそれぞれの言語特有のプロソディーがある。日本語には日本語特有の、中国語には中国語特有の、英語には英語特有のプロソディーがある。

プロソディーは言葉の意味とは関係ない。タレントのタモリは中国語をマスターしていなくても中国語をしゃべっているように、韓国語をマスターしていないのに韓国語をしゃべっているように声を出す。タモリは元はジャズの世界にいた人なので、音楽的才能を駆使して中国語や韓国語をしゃべっているようにハミングできるという訳である。

話し手の感情は、相手が言葉の意味を理解していなくても、プロソディーで相手に伝わる。

最近の若者は、寒いを「さむっ」、恐いを「こわっ」と言う。「さむっ」「こわっ」のプロソディーの方が感情が籠もっていると思っているからである。これは文化の変遷と言えよう。

### 1.2 赤ちゃんへの言葉掛け

親は赤ちゃんに対しては年長児に対してより一層の表情を込めて言葉を掛ける。例えば、赤ちゃんを叱る時はおっかない顔をしながら「メッ」と言う。こうすると赤ちゃんは、怖い顔表情、と、叱るという言葉の意味ではなく怖そうなプロソディー、の両方で叱られていることを理解する。

子どもが幼児期になったら、親が表情を変えないで「ママ、怒ってるのよ」と言うだけで、つまり、言葉の意味だけで叱られたことを理解するようになる。これは情動と情動語の分離が出来るように発達した事を意味する。

### 1.3 受容

臨床心理学、心理療法における最も重要な概念は受容である。

受容とは、心理治療者がクライアント（相談に来た人、相談者、患者さん）を受け止め、理解し、認め、受け容れ、共感する事とされている。

最も重要な事は治療者がクライアントを受容している事をクライアント自身が理解する事である。治療者が受容していてもクライアント自身がそれを感じ理解しなければ全く意味は無いのである。

重症心身障害児と関わる人、重症心身障害児を療育しようとする人は誰でも心理療法技法を身につけ、彼らに対して受容的に関わる事が求められる。

#### 1 4 被受容感 受容されている事の理解

大人は相手の目、顔の表情、仕草を読んで相手が自分を受容しているかどうか判断できる。しかし、発達の未熟な重症心身障害児は大人のように読み切れない。だから、大人が受容している事を知らせてあげなければならない。重症心身障害児の心に“分かってもらえてる感”、被受容感が醸し出されるように積極的に働き掛けなければならない。

重症心身障害児の心の中に被受容感を作らないと、大人がどんなに受容しているつもりでも意味は無い。

#### 1 5 “凶星を言う”

“分かってもらえてる感”、被受容感を重症心身障害児の心中に作る方法は“凶星を言う”である。

“凶星を言う”とは彼らの感情、気持ち、行動を親が代弁してズバリ言い当てることである。

喜んだら「嬉しいんだ」、怒ったら「怒ってる」、気持ち良さそうなら「気持ち良い」、悲しそうなら「悲しい」、嫌そうなら「嫌なんだ」、恐そうなら「怖いね」、驚いたら「びっくりしたあ」、泣いたら「泣いた」、はしゃぎ過ぎの時は「テンション上がってるよ」、膝をぶつけたら「痛いね、痛い痛い飛んでけえ」、食べたがったら「お腹空いてんだ」など気持ちを代弁して大人が言う。

ジッと見ていたら「見てるんだ」、積み木を積んだら「積めたね」、歯磨き中には「歯磨き歯磨き」、飲み物を飲んでる時は「ゴクンゴクン」など行動をアナウンスする。これも“凶星を言う”である。

ごによごによと意味が分からないけど何か言ってる場合は、言いたそうな事を、例えば、「おはよう」とか、「はい」とか、「テレビ見たいだね」とか、「お水欲しんだ」とか、こちらは“試される大地”状態に成っている代弁して言う事が、彼らにとっては付き合ってもらって居る事になるから、コミュニケーション成立のチャンスが広がる事に成る。

#### 1 6 初語が 24 歳

“凶星を言う”は重症心身障害児にも勿論有効である。何故なら、上述のように言葉にはプロソディーがあるから、言葉の意味が分からなくてもプロソディーで分かり得るのである。また、言いたくても中々言葉が出て来ない時に凶星を言われると、真似し易い手本

を提示された事に成るので、スーッと言葉が出てしまう事もある。

有意語のない重度重症心身障害の Rett 症候群の女性 K さんは 24 歳で初語を発した。

K さんのお父さんは洞爺湖温泉のホテルのコックで単身赴任、そのため普段は母子二人家庭でテレビのチャンネル権は K さんに有った。有珠山噴火によってホテルが埋まってしまったためお父さんは長期家に居る事に成り、それまでは K さんが持っていたチャンネル権がお父さんに取られてしまう事がある事に成ってしまった。K さんが見たいテレビを見られなくて苛々しているのがお母さんには分かったので、そういう時は「嫌だね」と凶星を言っていた。そうすると、やがて K さんは凄く嫌そうな時に「ヤダー」と叫ぶようになり、これが初語と成った。

気持ちを表現したくて悶々としている時、母に言われた凶星が手本に成って、言葉を言えるように成ったという訳である。

## 1 7 肯定的言葉掛け

### 1) OK の言葉掛け

児が何時ものように当たり前のように何かした時、「OK、それで良いよ、またやろうね」と、OKサインを出しつつ声掛けする。

例えば、いつものように飲み込んだら「OK」、いつものような反応を示した時に「OK」と。

言葉の意味が分からなくても、プロソディやこちらの表情、その場の和やかな雰囲気でも認められ肯定されている事は分かる。

### 2) 事前アナウンス

人間誰でも、予想通り、期待通り、想定内であれば、心は穏やか、和やか、安心が広がる。だから、クライアントに関わる時、次の行動予定を順繰り順繰り話し掛けて伝えると、児に安心感、達成感、満足感、信頼感を醸し出す事が出来て、児の心の健やかさを育てる事が出来る。

例えば、食べさせる時は「ゴクンできたね。お口にご飯ですよ。次は御汁ですよ。美味しいね。」など、離乳食を赤ちゃんに食べさせる時の様にアナウンスしながら語り掛けると、児に次の事を予想する知恵を育てる事に成る。

### 3) カウントダウン

子どもはやりたがっているが、大人（親）すればやって欲しくない時、頭ごなしに駄目出しすると、返って拘り、切り替えが遅く成る事がある。

例えば、「3 回もやって良いんだよ、3 回もできるんだよ」と「も」を強調しつつ「君の気持ちは分かっているよ」を伝え、「1 回 2 回 3 回」と数え、「3 回もやったね、いっぱい出来たね」と満足感達成感を醸成すると、切り替えが段々スムーズに成る。

## 1 8 療育的関わり方の基本

肯定的に関わる事、否定的ではなく、が良い結果に通じる。

「～しないの」と言う否定的声掛け、否定的関わり、ではなく、「～してね、～したら良いよ」と言う肯定的言葉掛け、肯定的関わり、をする方が児のやる気を育てる。

例を以下に記す。

持ってる物を落としちゃったら「落とさないよ」ではなく、「落としちゃったね、しっかり持ってよう」と言いつつしっかり持っている所を見せ、獲得目標を見せる。

泣いたら「泣かないで」ではなく、「悲しいねえ、ニコニコだよ」と言って笑顔を見せ、「こういう顔したら良いんだよ」というメッセージを伝える。

ぶつけて痛がってたら「痛くない痛くない」ではなく、「痛いの痛いの飛んでけえ」と言いながら撫でては投げる振りして、痛みが飛んでってしまうような雰囲気を作る。

騒いで奇声を上げて居たら「騒がないよ、うるさいよ」ではなく、「声出したいんだ、小声でね」と言ってから奇声を小声で真似て言う。これが「こういう声なら良いんだよ」と言うメッセージを伝える事に成ると同時にやっても良い事の手本に成る。小声で奇声を上げれば迷惑は少なく成る。